東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2007-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/853

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動

下道郁子

1　はじめに

明治期の日本人が、洋式の歌を自発的に口ずさむようになるには、どのような過程があったのだろうか？　明治５年の学制発布で学校教育において「唱歌」は必修科目となり、国家の政策により音楽は「西洋化」と方向づけられた。だが伝統的な日本の音構造とは異なる西洋式の唱歌がすぐに愛唱されたとは考えられない。幕末、西欧諸国の軍事力の脅威にさらされた日本は、自らも西欧の一員になろうと全てを西洋化し始める。しかしこと音楽に関しては難しかったと言われている。日本人が洋式の歌を愛唱するようになるまでには、長い時間を要し、様々な過程を経たに違いない。

明治期、人々に愛唱された洋式の歌には主に４種類あった。賛美歌、軍歌、唱歌、そして寮歌である。「賛美歌」はキリスト教の布教目的、「唱歌」は学校の教育目的、軍歌は戦闘意欲の鼓舞を目的として歌わされた。いずれも教会や国家からの強制である。しかし寮歌は違った。寮歌だけは真に学生の自発的な歌であったと言える。本論文は自発的な音楽文化活動の証しとして寮歌に焦点を当て、戦前の高等教育において行われた音楽文化活動の諸相を明らかにし、音楽専門家ではない人々の音楽文化活動において洋の東西が融合されていく過程を辿ろうとするものである。

2　寮歌とは

寮歌の歴史は「旧制高校」の歴史でもある。明治19年の中学校令により、各府県に１校の尋常中学校と、全国に５校の高等中学校が設置されることになった。明治27年に高等学校令が公布され、高等中学校は高等学校と改称される。その後、旅順高校創立の昭和15年までに、官立27校、帝国大学予科３校、公私立７年制高校７校と学習院を合わせて、計38校が創立された。しかし戦後の教育改革により昭和25年までに全てが廃校となり、これらの学校は現在では旧制高校と総称されている。

旧制高校の教育理念は教養教育、つまり人間形成であった。高度の専門教育を受ける帝国大学への進学準備として、外国語を中心とする一般教養を学ぶ旧制高校の教育を押し進めたのは

初代文部大臣の森有礼と考えられている。森は欧米を訪問し、教育や文化の在り方に感銘を受け、また熱心なクリスチャンでもあった。

旧制高校の人間形成の為の教育に重要な役割を担ったのが、寄宿制であった。寮における共同生活が若者の精神を培ったのである。同じ全寮制でも師範学校では、学問的にも精神的にも厳しい監督のもとに規則正しい軍隊式の生活が強いられた。しかし旧制高校では大幅な自治が認められていた。寮歌とはこの寮生により作詞、作曲され、歌われた歌と定義される。主な種類として、寮の記念祭の歌を中心に、運動部の歌、応援歌、校歌、卒業生が寮の記念祭に贈った寄贈歌等がある。

3　第一高等学校寮歌の研究意義

本論文では38校の旧制高校の中から、第一高等学校の寮歌を対象とする。旧制高校38校の寮歌は約2300曲あると推定されるが、この中でも最も歴史の古い第一高等学校の寮歌は約360曲あり、全寮歌の中でも愛唱された名歌が最も多く生まれている。また一高（第一高等学校の略称）の寮歌は信頼できる資料として保存されている。開学130年を期に「第一高等学校記念事業」のもと、歴史と伝統を伝える重要資料の整備、保存が行われ、寮歌集の最終改訂版が平成16年に出版された。最期の一高の卒業生が80歳近い高齢に達している現状を考えると、この改訂が最期である。また一高は東京大学予備門であり、卒業生の多くは東京大学に進学し、戦前の日本の政治、経済、文化において指導的な人物となった。卒業生には夏目漱石、正岡子規、斉藤茂吉、谷崎潤一郎、岩崎小弥太、和辻哲郎、芥川龍之介、広田弘毅、岸信介等がおり、蒼々たる顔ぶれである。このような日本の各界の指導者達となった者が人間形成時にどのような音楽文化に囲まれ、活動をしていたかを知ることは、人間教育における音楽の役割の一端を審らかにしてくれると思われる。

第一高等学校の沿革及び歴史

第一高等学校系統表[1]によると、起源は元禄3年創設の江戸幕府の学問所、昌平坂学問所まで遡る。明治元年に昌平学校、明治2年大学、明治6年に開成学校と変遷していく。この後、江戸幕府の西洋医学所から発展した東京医学校、同じく江戸幕府の洋書調所から発展し、明治2年に大学南校、明治7年に東京英語学校となった諸教育機関と融合して、明治10年に東京大学予備門（東京大学法理文三学部附属）となる。さらに東京外国語学校独語科、仏科と帝国大学工科大学予科と融合して明治19年の中学校令により第一高等中学校、明治27年に高等学校令により第一高等学校となる。戦後の教育改革により昭和24年に制度上、東大駒場の教養

1　第一高等学校六十年史附表

学部に吸収され、25年に閉校となる。昭和21年から校長となり、後に文部大臣になった天野貞祐は、旧制高校の特徴である人文教養教育を、新制大学に「前期大学」を設けて実施する案を力説したが、支持されなかった。

4　時期の限定：明治23年～45年

自治寮60年の歴史の中で約360曲の寮歌が生まれたわけだが、寮歌の歴史は約五期に区分される[2]

第1期　明治24～31年：揺籃時代

第2期　明治32～43年：第一次開花期

第3期　明治43～大正15年：第二次開花期

第4期　昭和2～10年：昭和前期

第5期　昭和11～24年：昭和後期（イ）戦前、（ロ）戦中、（ハ）戦後

この時代区分は一高だけではなく同時に寮歌全体にも適応できると考えられる[3]。本研究の最終目標はもちろん全寮歌の分析と考察であるが、本論文で第2期の2年後まで、つまり明治時代を一つの区切りとして対象とする。この時期は日本が急速に西洋音楽を受容し、学校の唱歌教育が徐々に普及した時期でもあり、また日清戦争（明治27～28年）、日露戦争（明治37～38年）の影響から、軍歌が盛んに書かれた時期とも重なる。この明治期にどのような寮歌が生まれ、またそこに関わった人々とその活動を考察することは、伝統的な日本の音楽文化から西洋式の音楽へと傾倒していった時代を知ることにもなろう。

明治23年～45年の学科課程と唱歌教育

実質的な寮歌第1号となった端艇部歌「花は桜木、人は武士」が作られた明治23年頃の一高の課程を観てみよう。明治20年の第一高等中学校規則によると[4]予科3年、本科2年という課程であった。予科は現在の中学高校に相当する課程と考えられる。明治20年の学科課程を表1に示す。本科は法学、医学、工学、文学、理学の5学科に分かれる。明治27年に第一高等学校となり、予科3年の高等学校で、実質的には大学予科となる。修業年限は3年で最終学年において、文系と理系に分かれる学科課程となる。この後の学科課程の変遷や内容は学生を理解する上で重要であり、また寮歌と無関係ではありえない。しかし詳述することは本論文の目的ではないので省略し、ここでは音楽に関わる部分のみをとりあげていく。

2　井上司朗「一高寮歌私観（一）」向陸駒場　p.11-22 Vol.XIV No.2　1972

3　高橋左門　旧制高等学校研究　寮歌・校風論篇　p.21

4　第一高等学校六十年史　p.143-154

表1に明治20年の学科過程を示した。これによると明治5年の学制で必修となった唱歌はない。しかし明治20年に入学試験に唱歌を課した記録があり、以下に示す。

明治20年3月29日制定：予科第3級への入学試験科目

倫理、国語及び漢文、第一外国語、数学、地理、国書、△歴史、
△博物物理及化学、△習字、△体操、△唱歌
（△は「当分之を省き漸を以て全科目に及ぼす」の注がある。）[5]

表1　明治20年の第一高等中学校予科の学科課程

年齢	学年	科目									
満14歳以上	第三級	倫理	国語及び漢文	第一外国語	第二外国語	地理	歴史	数学	博物	国書	体操
満15歳以上	第二級	倫理	国語及び漢文	第一外国語	第二外国語	地理	歴史	数学	化学	国書	兵式体操
	第一級	倫理	国語及び漢文	第一外国語	第二外国語	歴史	数学	博物	物理	国書	兵式体操

また軍歌を授業で行った形跡としては、明治21年9月17日付けで「予科第二級の学科課程中兵式体操一週五時の中に軍歌を加え、正科として一時間之を課することとす」と記されている[6]。更に明治24年10月2日付けで「本校予科第二級唱歌の学科は当分授業を休止することとす」と記され[7]、唱歌が授業で実施されていたことが推測できる。

鈴木米次郎の回想

唱歌教育が実施されていた痕跡として、鈴木米次郎（1868-1940）の回想がある。鈴木米次郎は東洋音楽学校（現東京音楽大学）の創設者で、明治期を代表する音楽教育者である。第一高等学校同窓生名簿（平成4年版）の職員の欄に、明治22年～24年まで嘱託として奉職していた記載がある。鈴木米次郎氏は東京音楽学校卒業後の明治23年7月に第一高等学校（当時は第一高等中学校）に務めることになった経緯と当時の授業の様子を次のように回想している。

「第一高等学校は、当時音楽の教師がいたが、どういうわけか、うまく行かないから、行っ

5　前傾書　p.165-166
6　前傾書　p.179
7　前傾書　p.211

て上手にやってくれ」と頼まれたので赴任した。…中略。しかしここでも小学唱歌集と幼稚園唱歌集の四冊でもって、高等学校の生徒を教授しろというので、随分難しい仕事であった。…中略。自然新たに入れられた学校唱歌とこれを教授する教師だって同様に扱われ、馬鹿にされ、音楽などやるよりは詩吟とか剣道、柔道などの方がいいという気分がみなぎっていた。そこで私は英語やドイツ語など外国語と結びつけて、君が代を始め、各国の国歌や民謡を原語で教えた。第一高等学校は英語、ドイツ語、フランス語科があったので、生徒は外国語は皆読めた。まず、英国国歌のようなやさしいものから始め、アメリカ国歌やフランス国歌など歌わせたら、非常に音楽を好むようになった。こうなると占めたもので、原語の歌の間に唱歌集の歌を加えてやると、どんどん喜んで勉強してくれた。なかには、歌だけではあきたらずバイオリンやオルガン・ピアノを練習する人もでき、学生の音楽会も始めるし、寮歌の作詞・作曲もするといった調子で、わずかの間に音楽は長足の進歩をとげた[8]。

以上の資料から寮歌活動が始まった明治24年以降の学生達は、言わば唱歌教育を受けた最初の世代であったということがわかる。おそらく学生達は詩吟調の音環境に囲まれて育ちながら、一方で学校では欧米の歌や軍歌を習い、洋式楽曲の歌唱の訓練を受け、西洋楽器の扱いや洋楽の素養を身につけ始めていた。この洋楽教育黎明期の学生達の音楽文化活動の一つが寮歌活動であった。

5　寮と寮歌
自治寮の歴史

明治23年2月に東西寮が完成し、志願者に入寮が許された。この時、木下廣次校長により基本精神として「四綱領」が告示された。

第一に自重の念を起し廉恥の心を養成すること
第二に親愛の情を起し公共の心を養成すること
第三に辞譲の心を起し静粛の習慣を養成すること
第四に摂生に注意し清潔の習慣を養成すること

さらに木下校長はこの四項の目的を達するために、管理者の手を借りず寮生自身の自覚と精神で、お互いに切磋琢磨して戒め合うことを奨励した。これを受けて徳義の高揚と実践を標榜する「徳義会」の総代として、2年生赤沼金三郎が寮生を集め、「我が国の官立学校に例がない、寄宿寮を生徒の自治に任せる決心と規約の討議」という内容の演説を行った。時は明治23年2月24日、ここに一高自治寮が立寮したのであった。文科、理科の区別なく、10名ほどが各

8　小出浩平　「鈴木米次郎先生（その一）」教育音楽　昭和39年11月　p.71

室に配属され、四綱領、籠城主義、自治共同の合い言葉のもと、人間修養の場としての寮生活が始まった。

23年10月には「校友会」が組織され、文芸、ボート、撃剣、柔道、弓術、ベースボール、ロンテニス、陸上運動、遠足の9部が所属した。音楽部は25年に発足し所属、28年に廃止になったが43年に楽友会として再発足している。

明治24年より記念祭が毎年行われる。明治33年に南、北、中の3寮が完成、この年より全寮制となる。明治38年に朶寮落成、大正8年に和寮、9年に明寮が落成し、全8寮となる。昭和10年に学校施設とともに駒場に移転し、南、中、北寮が開寮、14年に明寮が開寮する。しかし戦後の教育改革により昭和25年3月に全て閉寮となる。

一高寮歌の種類と内容

一高の寮歌は数の多さとともに、内容の豊かさも抜群である。寮歌といっても様々で、記念祭寮歌、寄贈歌、部歌、応援歌、凱歌等がある。内容は護国の精神、自治寮の誇り、青春や友情の謳歌、真理の探求、自由への憧れ、時代、社会への洞察や批判と、理想を掲げた格調高いものである。男女の恋愛をうたったものは全くない。

寮歌は寮歌祭、記念祭等の寮の諸行事や入学式、会合、他校との交歓会等の学校の行事にも歌われた。一高には校歌がなく、いつの頃からか「全寮寮歌」(明34)「嗚呼玉杯に」(明35)が正式な行事の際に歌われるようになった。

寮歌第一号

明治23年4月13日に隅田川で行われた一高対高等商業(現一橋大学)のボートレースの前日、翌日の試合の勝利を確信して、自治寮の初代委員長であった赤沼金三郎が凱歌を作詞、全寮生を東寮の階上に集め歌唱指導を行い、気勢をあげた。これが事実上の寮歌第一号「花は桜木」である(譜例1)。旋律は軍歌の兵隊節を借り、「デンデンコ」という合いの手が入る節回しである。歌詞は五・七の句全45行から成り、初めの15行は武士道的一高生の心生きを、残り30行はボートレースの実況中継を歌っている。試合当日、赤沼は水陸の応援隊を指揮、勝利を導いた。この歌は寮生の心をとらえ、明治末期まで集会の締めくくりの歌として必ず歌われた。自治寮設立の功労者による第一号寮歌誕生以来、毎年行われる記念祭ごとに数篇ずつ寮歌は作られ、昭和24年の事実上の終焉までの60年間、寮歌は絶えることはなかった。

どのように歌われ、伝えられたのか

寮歌は、歌詞は文書で伝えられたが、基本的に口伝であった。そのため原譜と実際に歌われている旋律や歌詞が異なるということが起きた。これは間違って伝承されたとか、あるいは歌い手が音痴とかいう問題ではなく、寮歌は歌われた時代、場所、あるいは一緒に歌った仲間によって、歌われる度に変容すると考えられる。ある時は長調を短調で歌ったり、あえて音程を

正確にとらず語るように歌ったり、様々である。

新入生の入寮の直後から、上級生による寮歌の教授が行われた。記念祭には寮生によって寮歌が何曲かつくられ、また帝大在学中の先輩から寄贈された。年に何回か行われる寮歌祭では、寮の庭に焚き火を焚いて囲み、棒を叩いて拍子をとる。寮生が叩く拍子は単純な2拍子で、歌の拍子とは関係ないようである。つまり歌が3拍子でも2拍子で叩く。午後7時頃から始まり、未明まで続く。

しかし特別な時にのみ歌われるのでは寮歌とは言えない。寮生の日々の生活の中で歌い継がれて行く。朝起きて寝床をあげながら、寮の廊下で、運動部の練習の後に浴場で、お花見、コンパ、対抗試合の応援、ストーム[9]に、喧嘩の仲裁に、友の送別にと歌いに歌われた。場や気分に合うように歌い変えられて、寮歌は育まれ伝えられた。

6　明治23年～45年＝第22回記念祭寮歌までの音楽的側面の考察

本論文では時代を明治45年までと限定するとともに、寮歌の種類も記念祭寮歌と寄贈歌に限定する。寮歌119曲の一覧を付録に示す。また寮歌は歌詞が何より重要であるが、本論文では歌詞よりも音楽的側面に焦点を絞る。

（1）歌詞の特徴

高橋左門は寮歌の歌詞の形を分類している。これは一高寮歌全体さらに他校の寮歌にも言えることであるが、この時期に特に顕著であると思われる[10]。

新体詩の流れに沿う七五調体

明治30年代の七五調の全盛期の影響下で生まれた。七五調では人の感情を細かに詠うことは難しいと批判されながらも、形式の殻にこもり、感情の直接の表出を抑制し、「男子の歌」にふさわしい詩型と考えられたようである。

漢語調読み下し体

初期には和語調の歌もあったが、漢語調の硬派の詩型が好まれ、一高寮歌の型と成って行く。

思想詩

四綱領、籠城主義、自治に対する解釈、人生観、世界観、寮生活、自己の青春、存在や生命

9　ストームとは旧制高校の寮生達の「騒ぎ」であるが、定義は難しい。
10　高橋左門　前傾書 p.22-28、37-39

等に対する感慨、真理探究、禁欲精進という哲学的深さをたたえた内容を詠っている。

晩翠調の影響

土井晩翠は明治30年代、島崎藤村と並び活躍したロマン派詩人である。それまでにない力強い、放胆な高吟が高校生の心をとらえ、寮歌に直接的な影響を及ぼした。例えば『春爛漫の』作詞の矢野勘治は「同室の委員黒沢久次氏から、今度の記念祭の寮歌はなるべく晩翠調がいい」という委嘱を受けたと回想している。

（2）音楽的側面の考察（付録参照）

作曲者不明、軍歌の替え歌が多い初期

明治20年代の寮歌の作曲者はほとんど不明である。明治23年に寄宿寮歌1号の「雪ふらばふれふらば」も作詞は教師の落合直文であるが、曲は「月と花とは昔よりの譜」と記されているだけで、不明である。明治28年の第5回記念祭より応募歌となり、寮生によって作られたようであるが、詳細は不明である。第8回記念祭からは各寮より一曲ずつ提出されるが、旋律は大捷軍歌等からの借用等、軍歌の替え歌がほとんどで、やはり作曲者は不明である。33年第10回記念祭南寮の『青くすみたる大空に』で初めて作曲者久保田一蔵の名が判明するが、この人の詳細はわからないままである。

主な愛唱歌と作曲者

寮歌の中には学校を出て、全国の若者が愛唱する国民歌謡となった歌がある。これらの歌を中心に、その作曲者を概観してみたい。

・栗林宇一　明34『アムール川の流血や』

一高は中退、後に二高教授となる。本歌の旋律は後に陸軍の『歩兵の本領』や日本共産党の労働歌に借用された。寄宿寮終焉時まで愛唱された歌。

・豊原雄太朗　明34『春爛漫の』

工科卒、後に鉄道省を経て、小倉鉄道社長となる。野球部の捕手であった。本歌は寮生の心をとらえるだけでなく、女学生にも人気となった旧制高校寮歌の模範型となった歌。

・島崎赤太郎　明34『全寮寮歌』

東京音楽学校卒で同校教授となる。オルガン演奏者でもあり、唱歌の作曲、立教大学をはじめ多くの校歌も作曲している。本歌は皆寄宿制を記念して専門の音楽家に委嘱された歌。校歌のない一高で、式典で歌われる重要な歌となった。

・楠正一　明35『嗚呼玉杯に』明36『緑もぞ濃き』

明治36年3月に中退後、北海道へ移住し、技手、村長等になった。幼少から音楽を好み、音楽学校への入学を希望したが、家庭の事情で断念、一高入学後も音楽学校の夜間選科に通っていたとも、音楽学校教授のユンケル主催の神田の音楽塾に通っていたとも伝えられる。音楽部を創立、田辺尚雄、穂積重遠、鳩山一郎たちが部員となった。突然中退した理由に、当時音楽学校の生徒だった後のオペラ歌手三浦環とのロマンスがあったと推測されている。[11]『嗚呼玉杯に』は一高のシンボルとなった名歌である。原譜はハ長調であったが、昭和10年の改訂時には、当時の寮生の歌い方の実情に則してハ短調で記譜された。

・鈴木充形　明33『弥生が岡に地を占めて』明37『都の空』明38『香雲深く立ち篭めて』明39『柏の下葉ゆるがせて』明41『としはや已に十八と』

工科卒で後日清紡績取締役となる。スポーツと音楽愛好家で、ピアノ、アコーディオンから三味線までこなした。

『都の空』は『嗚呼玉杯』などと並んで永く愛唱されただけではなく、流行歌『熱海の海岸散歩する』という「金色夜叉」の主題歌にまで利用され、全国に広まった。太平洋戦争中は寮生の出生壮行歌にもなった。

・田辺尚雄　明36『春まだ浅き武香陵』

理科卒で大学では文学部、理学部両方を卒業。東洋音楽研究で学士院賞を受けた文化功労者。在学時は音楽部で活躍、東京音楽学校の選科で声楽も学んでいた。愛唱歌とはならなかった本歌は、音楽部を通して北寮から依頼された。最初に作った曲が寮生の好みに合わず、不本意にも書き直し、本人は納得いかない「でき」になったと回想している[12]『嗚呼玉杯』発表の記念祭ではヴァイオリンを演奏し女学生の注目をあび「柔軟なやつ」と硬派学生から目をつけられたという。「巌頭之感」を残し華厳の滝で投身自殺をした美少年、藤村操にヴァイオリンの個人教授をした[13]。

・大島正満　明38『平沙の北』

理科卒で後に理学、農学博士、動物学者。朝日新聞に台湾高地のタイヤル族が『嗚呼玉杯』を歌っていたという紀行文を載せたことでも有名。

・沢村寅二郎　明39『太平洋のなみの穂に』

11　秦郁彦『旧制高校物語』p.15-16
12　田辺尚雄「私の寮歌作曲について」『向陵』Vol.XIV No3 p.14
13　秦郁彦　前傾書 p.17

文科卒で後に東京大学文学部（英文学）助教授となる。本歌は作詞、作曲者共に文系の珍しい組み合わせ。付点８分音符＋16分音符と付点４分音符と８分音符を組み合わせたリズムの３拍子で、洋式に洗練された雰囲気をもつ。

・石川鐵夫　明39『波は逆巻き嵐あれて』

独法科卒で後に満鉄審査役を務める。本歌は日露戦争勝利後の時流に流されない高い認識を歌っている。

・内海磐夫　明40『仇波騒ぐ』

工科卒で、京都大学進学後は学内の音楽活動をリードしたらしい。奥村電機商会に勤めるが大正９年に病死。息子も昭和14年の寮歌を作曲。本歌は青年期の友情の美しさ、尊さを歌い、旧制高校全ての学生生活を特徴づけた名歌。一高の同窓会、クラス会で愛唱され続けている。

・堀内伊太郎　明44『月は朧に香をこめて』明45『春は来ぬ』

英法科卒、浅田飴本舗の後次で、弟敬三は作曲家、音楽評論家で音楽之友社設立に関わった。本歌は原譜にブレスの記入があり、作曲者に西洋の音楽の素養があったと推測される。

・飯田銀四郎　明44『光まばゆき春なれど』

医科出身、茨城県で病院長をしたとしか判らない。本歌の１、４番が一高生の愛唱歌の中でも代表作となる。

・朝永研一郎　明45『春より暮れて春に入る』『荒潮の潮の八百路ゆ』

工学博士、ヴァイオリンが達者で音楽一般にも造詣が深い。『荒潮の潮の八百路ゆ』は楽友会の応募歌で、男声三部合唱曲である。

（３）資料

原譜は数字譜であったが、昭和10年の改訂版で当時実際に歌われていた旋律に書き改められ、この時五線譜に書き直された。明治37年に初の寮歌集が出版されて以来、昭和10年、30年、42年、50年、そして平成16年と改訂出版されてきた。本論文では平成16年の最終改訂版を使用している。

伝承と原譜との相違

前述したように寮歌の歌詞は文書で伝えられたが、基本的に口伝であった。そのため原譜と実際に歌われている旋律や歌詞が異なるということが起きた。とくに調性に関して顕著である。これは原譜が数字譜で、「は調」、「と調」と記されているため、長調か短調かは明示されなかっ

たという実情があり、当時の日本人の音感に西洋式の調性感というものがなかったためと推測できる。例に全寮寮歌『闇の中なる』の原譜と最終版をあげる（譜例２、３）。

島崎赤太郎作曲のこの歌は数字譜では「に調」と表記されているが、五線譜では「ニ長調」で記譜されている。

（４）音楽要素の考察

明治45年、第22回記念祭までの寮歌119曲の一覧を付録に示した。旋律不明の曲が９曲あるので、110曲が分析対象となる。第１号寮歌「花は桜木」は、実際は応援歌なので除いた。以下付録に示した６つの音楽要素に沿って考察していく。

拍子

2/4が60曲、4/4が37曲、3/4が４曲、6/8が５曲、拍子が途中で変化する歌が４曲で、圧倒的に2/4が多い。また4/4もほとんどが２拍子系で拍子がとられている。初の３拍子は明治38年『平沙の北に』、『武香が岡』である。他に３拍子の曲として39年に『太平洋の』、『花の香むせぶ』の２曲があるが、以後３拍子は用いられない。また寮歌ＣＤ[14]の演奏では太鼓を叩きながら歌っているが、打っている拍子は全て２拍子である。集団で歌うのが基本であるので、拍子感がはっきりしているのが特徴と言える。

調性

ほとんどがハ長調で記譜されているが、実際の演奏が譜面と異なるのがこの調性である。前述したように、原譜の数字譜での記載が、例えば「は調」という書き方で、長調、短調の区別がされていなかった。五線譜で記された段階で明らかになったわけだが、記譜が長調でも実際は短調で歌われたり、またその逆で短調が長調で歌われたりしたようである。寮歌ＣＤの演奏でも、例えば『春爛漫』（譜例４）は長調で歌われているが楽譜は短調、『仇浪騒ぐ』は楽譜は短調だが、録音では前半は短調、後半は長調で歌われている。全寮寮歌『闇の中なる』は楽譜はニ長調、寮歌ＣＤの演奏も長調だが、実際は最初の小節のみ短調、後は長調で歌っていたらしい。この調性に対する無頓着さ、或は自由さは、おそらく明治期の日本人に長調、短調という洋式の調性感が定着していなかったからと推測できる。Ｖ→Ｉのカデンツアがはっきりとわかるのが、37年『明けぬと告ぐる』が最初である。

このことからもこの時期は未だ西洋式調性感が感性としては浸透していなかったことがうかがえる。

14　1971年コロンビアで複製されたＬＰをそのまま複製したＣＤが2004年に一高同窓会より出されている。

リズム

付点８分音符＋16分音符、又は倍の付点４分音符＋８分音符の「単純付点（もしもし亀よ型リズム）」がほとんどである。他に『太平洋に』のように、この二つを組あわせた複合付点型リズム、また付点４分音符＋８分音符＋４分音符＋４分音符の「付点＋等分（金太郎型リズム）」もある[15]。明治38年『武香が岡』で初めてアウフタクトが用いられ、41年『弥生が岡』で三連符が用いられるなど、45年に向けて多少リズムが複雑になっていく。しかし総じて、単純付点型で、いわゆる「ピョンコ節」である。

音階

ほとんどがヨナ抜き長音階（ドレミソラ）で、次にヨナ抜き短音階（ドレミ♭ソラ♭）が用いられている。初の長音階（ドレミファソラシ）は37年の『明けぬと告ぐる』である。39年『春は櫻花咲く』で初の和声短音階（ラシドレミファソ＃）、45年の『花は櫻とうたひけむ』で初の旋律的短音階（ラシドレミファ＃ソ＃）が用いられている。41年以降、長音階の頻度が増えていく。

形式

形式は４小節を一単位にアルファベットで記してみた。4/4拍子の曲は２小節を一単位とした場合もある。４の倍数にあたる小節で、主音で終わっている場合は終止とみなし縦棒｜で区切った。全体的に洋式楽曲の特徴である「対比と繰り返し」というパターンはほとんどなく、徒然なるままの変容形式である。最初のフレーズを最後の方で繰り返し、洋式楽曲的な統一感をもった曲は40年の『紫金の彩羽』、『おもふ昔の』から現れてくる。愛唱歌として歌われている曲は一概に洋式楽曲的な統一感をもたない。洋楽の専門的な教育を受けていない素人の作品であることも要因であるが、明治期の日本人の様式感が西洋式でなかったと考えられる。

その他：強弱、曲想表示、臨時記号、借用和音等が初めて使われた曲

初のフェルマータは34年の『春爛漫』であるが、原譜の数字譜にはない。フォルテ、ピアノの強弱指示が現われるのが明治38年『紫淡き』、初の臨時記号でドッペルドミナントの使用と考えられるのが38年『比叡井の山の』、初の３小節間の転調（ト長調→ニ長調）が38年『紫淡き春霞』、クレッシェンド、ディクレッシェンド、フォルテッシモ、アクセント等が多用され、初の３連符の使用が39年『花の香むせぶ』である。40年音楽隊作の『みよしのの』は6/8拍子、二部合唱、リタルダンドも使用される洋式楽曲、39年の東大寄贈歌『春は櫻咲く』は原譜の段階から「静かに」という曲想指示があり、初めてブレス記号が書かれ、多彩な強弱やリタルダンドの使用、和声短音階で様式楽曲の作品である。41年『弥生が岡の』は３連符と高音ヘ

15　リズム型名称は筆者が分類、命名した。

の跳躍によるコーダ風の終わり方、45年『しずかに沈む』には「緩やかに」と指示があり、『花は櫻と』はロ短調→ニ長調→イ長調と転調、『荒潮の』ではヘ長調（10小節間）→ヘ短調（12小節間）→ヘ長調（13小節間）と転調し、元来男声三部のために書かれたという完全に洋式楽曲の作品となっている。

敬遠された洋式楽曲

以上の考察から明治45年に向かい、一部の学生が洋楽の知識を持ち、洋楽を指向したことが伺える。しかし多くの学生には洋楽式楽曲は上品でむずかしく感じられたようである。全寮寮歌『闇の中なる』の作曲者島崎赤太郎は明治45年までの寮歌では唯一「専門の作曲家」であるが、依頼した学生達は当時の寮生の好みにあうように専門家の島崎赤太郎にかなり注文を付けたようである。また『太平洋』を作曲した沢村宣二郎は、「あの曲を作る時、初めは半音を沢山使ったのです。ところが当時は半音などあまり歓迎されない時代なので練習の時旨くいかない。そこでその半音をとってしまったのです。」と回想している。さらに記念祭で歌われるとき、蛮声を張り上げる人がいて、笑殺され不評に終わり、悲観したと述べている[16]。3拍子の『太平洋』は、発表当時は人気がなかったが、10年くらい経ってから一般に歌われるようになったという。このことは洋風の歌に多くの人が親しみをもてるようになるまで、時間を要したことを物語っている。10年後というと、大正4年頃である。

寮歌作曲者の堀内伊太郎、上田寛、朝永研一郎は楽友会に属していた。ここでは週2回午後3時から5時まで、声楽、単音唱歌、重音合唱の授業と、ヴァイオリン、ピアノ、オルガンの個人教授が行われていた[17]。このように洋楽を積極的に学び、指向する寮生と、洋楽風を上品で難しいと敬遠する寮生とが混在していたと思われる。

7　まとめ

明治23年から45年までの洋楽黎明期、日本の将来を背負う若者を教育するエリート校の音楽活動を概観、考察してきた。正規の授業に音楽はなかったが、自治寮という人間教育を行う場で寮歌をとおして音楽活動は行われ、教育の一端を担っていたことが理解できた。医学、工学、文学、法曹界、経済界、政界等様々な分野に巣立ち、日本の指導的な立場で活躍することとなった若者、つまり音楽を専門としない若者が、作曲をし、歌の練習を重ね、洋楽の知識を学び、楽譜という資料に残したことは、彼らの音楽を大切に思う姿勢や、教養の広さの軌跡でもある。

16　高橋左門　前傾書　p.72-73
17　向陵誌　p.1115

今回の寮歌119曲の分析で、明治45年に向けて洋式楽曲の寮歌の数が増え、一部の寮生にかなりの洋楽の知識や実践経験が広まったことが判明した。しかし一方で多くの寮生の感性は日本的な歌を嗜好したこと、洋楽を上品とか難しいと敬遠したことも判り、この時期にどのように日本人に洋楽が浸透していったのかという過程を垣間みることができた。

今後の研究課題は、1）今回対象とした明治期の119曲のさらに詳細な分析、2）時代を大正、昭和と広げ、また部歌、応援歌まで含めた残り約240曲の分析、3）同窓会誌等の文献資料の研究、4）卒業生へのインタービューによる情報収集、である。教養教育に基づく人間性の育成を特徴とした旧制高校の廃止は戦後の日本の文教政策の大失態と言われている。寮歌の研究を通して、高等教育における教養教育の必要性、人間教育の大切さをあらためて認識し、提唱していきたい。

（本学准教授＝音楽教育学担当）

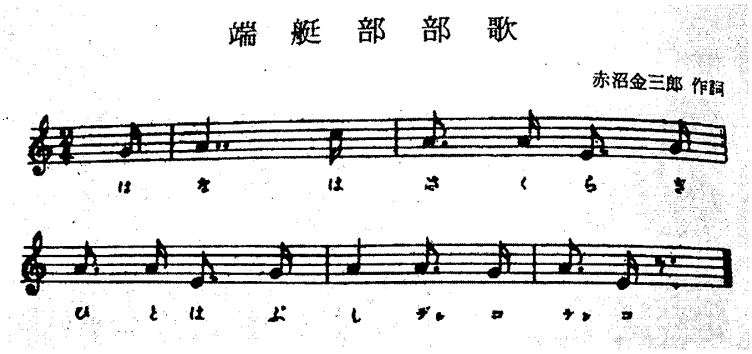
参考文献

井上司朗「一高寮歌私観（一）」向陸駒場　p.11-22 Vol.XIV No.2　1972
井上司朗「一高寮歌私観（二）」向陸駒場　p.11-22 Vol.XIV No.3　1972
小出浩平　「鈴木米次郎先生（その一）」教育音楽　p.71　S39/11　1964
『向陵誌』　一高同窓会　1974
『自治寮六十年史』　一高同窓会　1994
『第一高等学校六十年史』　第一高等学校　1939
『第一高等学校寄宿寮寮歌解説』　一高同窓会　2004
高橋左門　『旧制高等学校研究　寮歌・校風論篇』　昭和出版　1978
田辺尚雄「私の寮歌作曲について」『向陵』Vol.XIV No3
秦　郁彦　『旧制高校物語』文藝春秋　2003
『寮歌集』　一高同窓会　2004

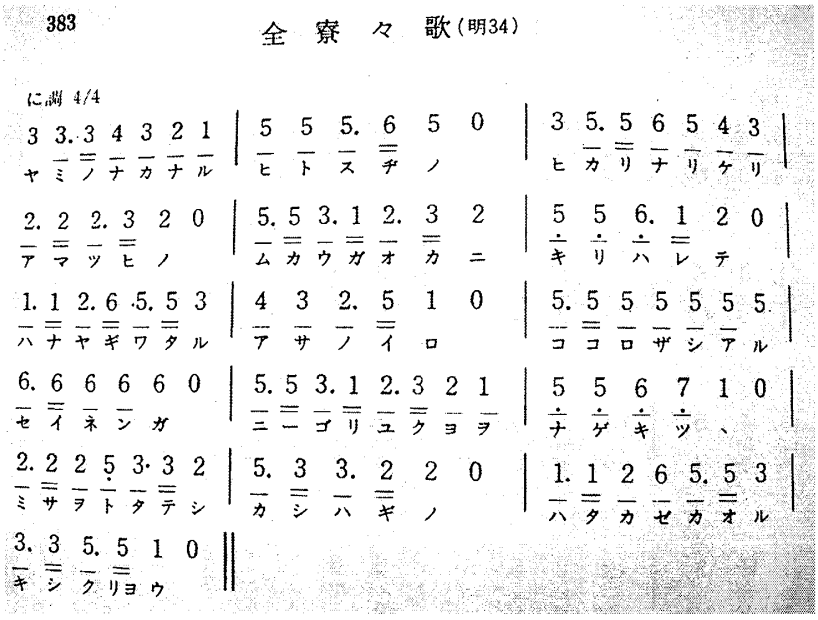
参考ＣＤ

第一高等学校寮歌ＣＤ　一高同窓会　2004

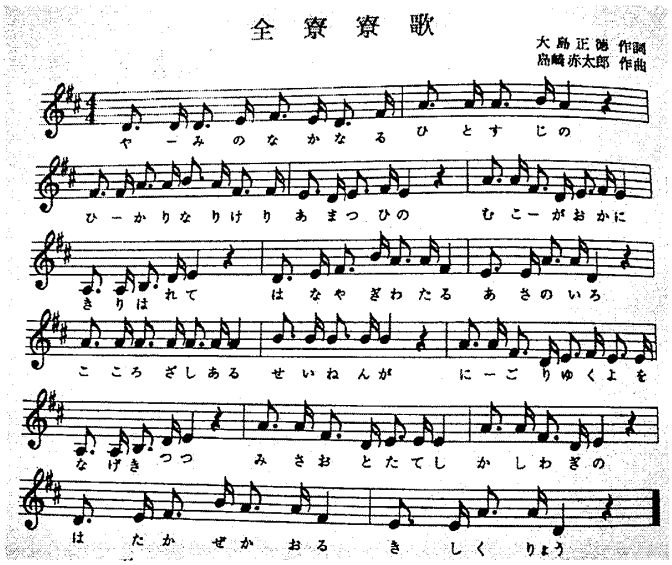
譜例１　『花は桜木』



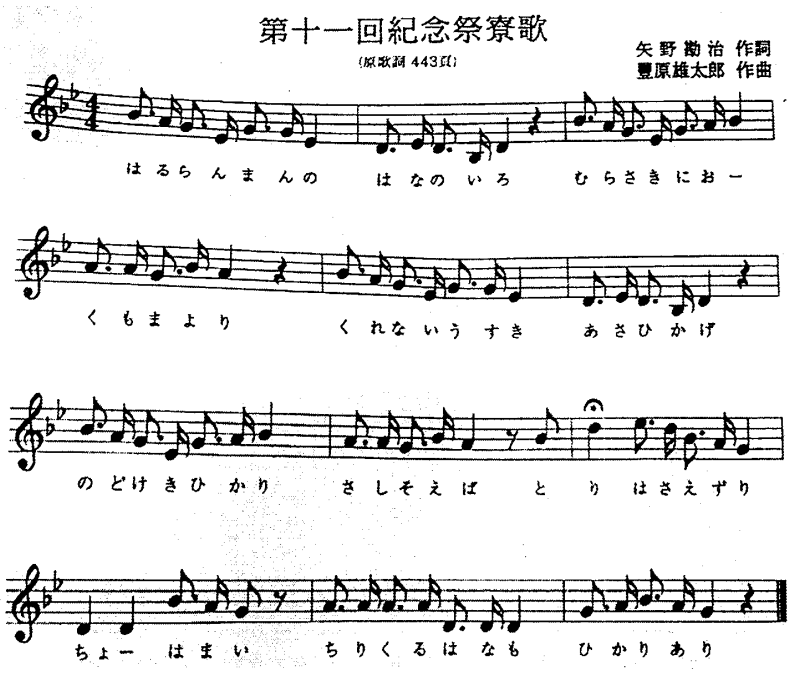
譜例２　全寮寮歌『闇の中なる』原譜



譜例３　全寮寮歌『闇の中なる』五線譜



譜例４　『春爛漫の』五線譜


第十一回紀念祭寮歌
(原歌詞 443頁)
矢野勘治 作詞
豊原雄太郎 作曲
はるらんまんの　はなのいろ　むらさきにおー
くもまより　くれないうすき　あさひかげ
のどけきひかり　さしそえば　とりはさえずり
ちょー　はまい　ちりくるはなも　ひかりあり

付録
空欄は不明

年	寮種 寄贈校	歌 名	「借用の曲譜」 又は作曲者	作 詞 者	拍 子	調	リズム型	音 階	形 式
23		雪ふらばふれふらばふれ	「月と花とは昔より」	落合直文					
28	東寮	たなびきわたる薄霞							
29	北寮	西に富士東に筑波の		中山久四郎					
28	南寮	富士の高峰の高き							
29	寮歌	身を捨て、ますら武雄が							
31	東寮	ニコライの無禮は							
	西寮	忠ち勇とのふたすぢに							
	北寮	我寄宿舎をたとふれば							
	南寮	我らはいかなるとも			4/4	G	単純符点	ヨナ抜き長音階	aba`c|dd`a`c
32	東寮	武成の昔ありきてふ	「黄海の役」	植竹一陸	4/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|ab|cd
	西寮	一度打てば三千里	大捷軍歌「水雷艇」		2/4	G	単純付点	長音階	ab|cd
	南寮	思えば遠し神の御代	「海城逆撃」		2/4	c	その他	ヨナ抜き短音階	ab|cd
32	北寮	向が丘の春風に							
33	東寮	千代よぶ声に星はさり	「楠公」	武林盛一	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cb|de
	西寮	あを大空を眺むれば	「湖島」	植竹一陸	4/4	G	その他	ヨナ抜き長音階	a|a|bcbda|e|
	北寮	見よ甘泉の花散りて	「守永偵察隊」		4/4	F	付点＋等分	ヨナ抜き長音階	
	南寮	青くすみたる大空に	久保田一蔵	上小澤潜	2/4	E	単純付点	ヨナ抜き長音階	
34	全寮	闇の中なる一すぢの	島崎赤太郎	大島正徳	4/4	D	単純符点	ヨナ抜き長音階	abcd|ecc`d
	東寮	アムール川の流血や	栗林宇一	塩田　環	2/4	G	単純符点	ヨナ抜き長音階	abcd
	西寮	春爛漫の花の色	豊原雄太郎	矢野勘治	4/4	g	単純符点	ヨナ抜き短音階	aa`aa`bb`
	中寮	輝き渡る紅の			2/4	C	単純符点	ヨナ抜き長音階	ab|cd|ef
	南寮	世紀の流れ絶えずして			2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cd
	北寮	姑蘇の豪は荒れ果てて		村上春一	2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cb`|eb"de
35	東寮	嗚呼玉杯に花うけて	楠正　一	矢野勘治	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き短音階	ab|cd|ef
	西寮	混濁の浪逆巻きて	廣田守信	大河平隆光	2/4	D	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cd|ef
	中寮	木の芽も春の朝ぼらけ			4/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|ab`|cdab`
	南寮	大空ひたす和田の原			2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcdef
	北寮	暴風驀然海あれて		和田一郎	2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcdef
	東大	我一高は天下の雄	「箱根八里」	中西四郎	4/4	C	単純付点＋3連符	ヨナ抜き長音階	abcdef…no
36	東寮	緑もぞ濃き柏葉の	楠正　一	柴　碩文	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcde|f
	西寮	暁寄する新潮の	小峰昇二	辻村　鑑	変	d	単純付点	ヨナ抜き短音階	abc|de
	中寮	かつら花咲く西の空		塩田　環	2/4	F	単純付点	ヨナ抜き長音階	a|bcde|f
	南寮	弥生が岡に地を占めて	鈴木充形	満井新太郎	2/4	a	単純付点	ヨナ抜き短音階	abcd|ed
	北寮	春まだあさき武香陵	田邊尚雄		2/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcd|ee`
	東大	筑波根あたり霞罩め			2/4	D	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cb`|ab`
	京大	比叡の山に我立ち手	廣田守信	鳥潟隆三	4/4	C	その他	ヨナ抜き長音階	ab|ca`
		春の日背をあたためて	「雪中行軍」	音楽隊	2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcdab
37	東寮	向が陸の自治の城			4/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cd|ee`
	西寮	明けぬと告ぐる鳥の音	三原新二		2/4	G	単純付点	長音階	ab|cd|ea`
	中寮	春三月の武香陵		青木嗣夫	2/4	c	単純付点	ヨナ抜き長音階	a|bcd|a`d`
	南寮	亜細亜の東蒼溟の	小峰昇二	青木得三	2/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abc|def
	北寮	都の空に東風吹きて	鈴木充形	穂積重遠	変	c	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|ce
	東大	思い出づれば 14 年	卒業東大生	卒業東大生	2/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcd
	京大	時は流れて 14 歳	卒業京大生	卒業京大生	2/4	E	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcd
	福岡	暁がたの星落ちぬ		鳥潟　碩	2/4	G	単純付点	長音階	ab|cd

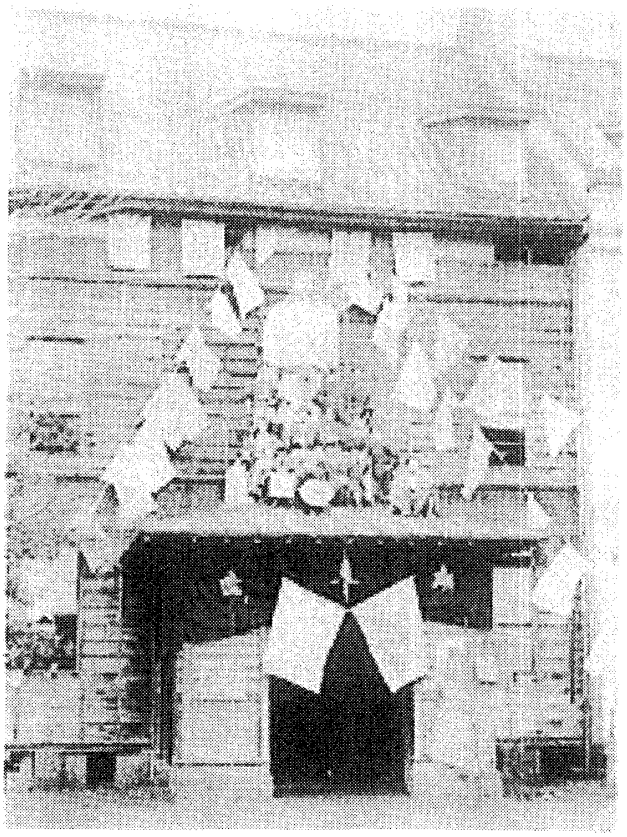
38	東寮	王師の金鼓地を揺れば	杉浦忠雄	松坂廣政	2/4	c	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|ab|c|d
	西寮	春爛漫の花霞	大島　廣	佐瀬武雄	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abc|ded`
	南寮	平沙の北に吹雪して	大島正満	青木得三	3/4	c	単純付点	ヨナ抜き長音階	aba`cde
	北寮	香雲深く立ち罩めて	鈴木充形	近藤有會	2/4	E	単純付点	ヨナ抜き長音階	a|bcd|ed`
	中寮	春長江のをたけびや		山本倍三	2/4	E	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cd|ef
	朶寮	向ヶ丘に冬籠る			4/4	C	その他	ヨナ抜き長音階	ab|cd
	京大	比叡の山の石だたみ		平野正朝	4/4	F	付点＋等分	長音階	ab：|cb
	福岡	紫淡き春霞			4/4	G	逆付点＋等分	長音階	ab|cd
	個人	武香が岡に春長けて	小笠原壬午郎	小笠原壬午郎	3/4	G	付点＋等分	ヨナ抜き長音階	ab|cd
39	東寮	群り猛る暗雲おひて	加福均三	深見秋太郎	2/4	Es	単純付	ヨナ抜き長音階	abcd|ef
	西寮	太平洋のなみの穂に	澤村寅二郎	黒田朋信	3/4	C	複合付点	ヨナ抜き長音階	ab|cde|b`
	南寮	霞かぎれる梢より	杉浦忠雄	佐藤荘一郎	2/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abab`|cd
	北寮	波は逆巻き風あれて	石川鐵雄		2/4	c	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cdef
	中寮	ああ軍沌の闇の色	大島　廣	栗原武一郎	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	a|bcd|ef
	朶寮	都は春の綾錦			2/4	C	付点＋等分	ヨナ抜き長音階	a|ba|bcdc`|b`
	京大	花の香むせぶ城の花			3/4	C	付点＋等分	ヨナ抜き長音階	ab|cd|c`e
		みよしのの花の香や	音楽隊	音楽隊	6/8	F	その他	長音階	abcc`
	福岡	柏の下葉ゆるがせて	鈴木充形	鳥潟　碩	2/4	c	単純付点	ヨナ抜き短音階	ab|cde
	東大	春は櫻花咲く	北川　泰	青木得三	4/4	e	その他	和声短音階	abcdeef
40	東寮	仇浪騒ぐ濁り世の	内海磐夫	岸　巌	変	c	単純付点	ヨナ抜き短音階	abcdef
	西寮	紫金の彩羽美はしき	颯田琴次	川部祐吉	2/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcda`b`
	南寮	春蝋かすむ朧夜は	井口春久	長瀬貞一	2/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cde|f
	北寮	剣の前にあぐみえて	黒崎幸吉	福井利吉郎	4/4	C	逆付点＋等分	ヨナ抜き長音階	ab|cd|ee`
	中寮	朝金鶏たかなきて			2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcdef
	朶寮	嵐を孕み風を呼ぶ	大島　廣		4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	a|ba|c|de
	東大	ああ大空に照る月の			2/4	D	単純付点	長音階	ab|cdef
	京大	思ふ昔の濁り行く			4/4	Es	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cda`b`
	福岡	袖が濱邊の夕潮に			2/4	D	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cd|ef
41	東寮	誓へば海のただ中に			2/4	D	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcdef
	西寮	蒼茫遠ようめいの	原　馨	今井登志喜	2/4	C	付点＋等分	ヨナ抜き長音階	a|bcda|b`
	南寮	弥生ヶ岡の花がすみ			4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abab`cd
	北寮	そよぐ橄欖風かおる	廣田義雄	田中木又	2/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcd|ef
	中寮	巨大の天霞	颯田琴次	吉植庄亮	4/4	D	付点＋等分	長音階	abcdd`
	朶寮	霞薫ずる深山邊の			4/4	E	単純付点	長音階	abcc`ab`
	東大	としはや己に	鈴木充形	青木得三	2/4	F	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cd|ef
	京大	いざ行かむ我が旅路			4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|ab|cd
	福岡	紫淡くたそがるる			2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcd
42	東寮	わが行く方は潮ぞ高き	新居一郎	石原雅二郎	2/4	C	単純付点	ヨナ抜き短音階	ab|cdef
	西寮	闇の醜雲うちはらひ			2/4	D	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cd
	南寮	潮高鳴り月落ちぬ	寺尾　新	金井為一郎	2/4	C	単純付点	ドレミソラシ	abc|d|ef
	北寮	玉の臺のおばしまに		吉植庄亮	4/4	G	単純付点	ドレミファソラ	abcdef
	中寮	紅雲映ゆる曙の色	廣田義夫	佐野秀之助	2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	a`ab|ab`
	朶寮	緋緘着けし若武者は	長井亜歴山	佐野秀之助	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	ab|cd
	東大	若草もえて	加福均三	佐野保太郎	6/8	D	その他	長音階	ab|ab|cd
	京大	天路のかぎり飛ぶ	内海磐夫	落合太郎	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	aba`c|b`d
	九大	をぐろき雲は空をとび		佐藤荘一郎	4/4	D	付点＋等分	長音階	abcdef

43	東寮	笛の音迷う波の上		石原雅二郎	2/4	C	単純付点	長音階	ab|cd|ef
	西寮	青鷺精を啄みし		峰尾都治	2/4	C	付点＋等分	ヨナ抜き長音階	a|bcd|ed`
	南寮	新草萌ゆる浅みどり	河村　修	新間智啓	4/4	C	逆付点＋等分	ヨナ抜き長音階	ab|c|de
	北寮	煙に似たる花霞		吉植庄亮	2/4	C	単純付点	長音階	abcda`b`
	中寮	颶風をはばみ雨を呼ぶ			2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcd|a`b`
	朶寮	春の臺の曙に			4/4	G	付点＋等分	ヨナ抜き長音階	ab|cd|a`d`
	東大	藝文の花咲きみだれ		大貫雪之助	2/4	c	単純付点	ヨナ抜き短音階	a|bc|b`de
	京大	武蔵野分きて吹き荒む		福井利吉郎	6/8	D	その他	長音階	abab`|cd
	九大	春の朧のよひにして		佐藤荘一郎	4/4	c	その他	ヨナ抜き短音階	abc
44	東寮	華陽の夢の花泛ぶ	上田　寛	高　潔	2/4	C	単純付点	長音階	ab|cd|ef
	西寮	月は朧に香をこめて	堀内伊太郎	中村恒三郎	2/4	F	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcd|ee`
	南寮	オリムパスなる諸神の	井上　赳	山宮　充	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abc|dc`|e
	北寮	妖雲瘴霧むらむらと	北寮六番室	北寮六番室	2/4	F	単純付点	長音階	ab|cd|ef
	中寮	八島を洗ふ南海の	橋口正樹	竹田武男	2/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcd|ed`
	朶寮	光まばゆき春なれど	飯田銀四郎	柳沢　健	2/4	C	単純付点	ドミファラシ	abcd|ef
	東大	雲巻き雲のぶ天外に		石原雅二郎	4/4	C	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcdef
	京大	雪こそよけれ此の郷は		福井利吉郎	2/4	E	その他	長音階	aa`ba"
	九大	雲や紫背振山		佐藤荘一郎	2/4	C	単純付点	長音階	abc|d
45	東寮	しずかに沈む春の日の	井原虎造	秦　豊吉	2/4	Es	単純付点	長音階	abc|d|e|f
	西寮	霧淡晴の野にみだれ	上沼健衛	久保勘三郎	2/4	c	単純付点	ヨナ抜き短音階	abab`|c|e
	南寮	春より暮れて春に入る	朝永研一郎	高瀬俊郎	2/4	D	単純付点	ドレミファソラ	a|ba`c|de
	北寮	天龍眠る富士の峰		松宮　順	変	D	その他	ドレミソラシ	ab|cd|bb"
	中寮	ああ平安の夢深く			2/4	C	単純付点	長音階	a|bcdef
	朶寮	希望の光紅に	加茂正一	石田三治	4/4	G	単純付点	ヨナ抜き長音階	abcb`|de
	東大	春は来ぬ、都の眺め	堀内伊太郎	小野清一郎	6/8	Es	その他	長音階	aa`|bc|dec`…
	京大	花は櫻とうたひけむ			6/8	h	その他	旋律的短音階	a|b|c|d
	九大	筑紫の富士に		石川勝治	2/4	e	単純付点	ラシドミファ#ソ	ab|cd|
	楽友会	荒潮の潮の八百路ゆ	朝永研一郎	井上　赳	4/4	F	その他	長音階	ab|cdeff`

写真

明治 32 年　西寮生の記念祭余興（自治寮六十年史 p. 366 より転載）

写真



明治 32 年　記念祭飾り付け　東寮玄関（自治寮六十年史 p. 366 より転載）